

原 著

高齢者におけるライフイベント体験と回想類型に関する研究

藤原宏美*¹ 島田 修*²

要 約

本研究では、高齢者を対象に、ライフイベント体験と回想類型との関連について検討することを目的とした。また、それぞれの回想頻度についても検討を加えた。ライフイベント体験に関しては、悪いイベント、中立的イベント、良いイベントの3種類に分類し、分析を試みた。

高齢者大学などの受講者163名を対象に質問紙を実施した。その結果、悪いライフイベントと回想類型の両価型との関連性が示された。また、悪いイベント体験を1年以内に2回以上体験した者は、そのイベントを体験しなかった者に比べて、回想頻度が高いことが示された。さらに、両価型と積極型の回想は、叙述型や否定型に比べて、回想頻度が高いことが示された。高齢者の回想を検討する方法論として質問紙だけでなく個別情報の援用をする必要性を示唆した。

序 論

1. はじめに

近年、高齢者の福祉施設や病院では、高齢者の回想に注目し、精神的健康の維持や向上を目指して、グループをつくり積極的に回想するように働きかける試みが増えている。回想についての研究に関しても、1960年代にButler(1963)¹⁾が、高齢者に普遍的で、肯定的意味をもつものとして回想を提唱して以来、さまざまな研究が行われてきた。

しかし、いまなお回想の概念的定義は確定しておらず、高齢者には普遍的な現象ではないことも示され(長田・長田,1994)²⁾、回想という現象自体に関して未だ不明な点が多い(Kovach,1990; Merriam,1993; 大和,1989; Webster,1993,1997)³⁻⁷⁾。この回想という複雑な現象を明らかにするには、それと関連する要因をひとつひとつ研究し、積み上げていくことが必要とされている。そこで、本研究では、回想を規定する1つの要因としてライフイベント体験に注目し、高齢者の回想がどのような機能を持つのかを明らかにせんとするものである。

2. 回想の概念

Butler(1963)¹⁾の見解によると、高齢者の回想とは死を意識することによって引き起こされるもので、回想することで新たな視点を得て、過去の未解決の葛藤を再統合し、死を受け入れられるようになったとした。McMahon & Rhudick(1967)⁸⁾は、回

想を「過去の経験、特に個人的に最も大事な経験について考える行為あるいは習慣」とし、Coleman(1974)⁹⁾は「遠い過去に関する言語の行為」とし、遠い過去は5年以上前と定義している。

明確に回想を定義するのに対し、長田・長田・井上(1989)¹⁰⁾は、過去回想を「自然に思い出される昔のこと」と広くとらえて、研究を行う場合もある。本研究では、長田ら(1989)¹⁰⁾の定義を参考にし、回想を「昔を思い出したり、考えたりすること」と広く捉えて研究を進める。

3. 回想の類型化

ところで、近年では回想を1つにまとめて定義するのではなく、機能や内容別に回想を類型化し検証することで、回想の諸機能を明確に定義し、同時に高齢者の適応にどのような回想がより有効であるかを探る研究が多い。

先駆的研究として、Romaniuk & Romaniuk(1981)¹¹⁾は、13項目からなる質問紙を作成し、地域住居者に実施し因子分析を行った結果、①自己への敬意・自己イメージの効用、②現在の問題解決、③実存・自己理解といった回想の機能に関する3因子を見いだした。①自己への敬意・自己イメージの効用とは、喜ばしい記憶の回想を楽しんだり、過去や自己について他者に話したりすることで、自己への敬意の念が高まるような回想をさす。②現在の問題解決とは、過去回想によって過去に達成したことや問題解決の方法を見だし、それを現在の問題解

*1 大正大学大学院 人間学研究科 臨床心理学専攻 *2 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科
(連絡先) 藤原宏美 〒175-0083 東京都板橋区徳丸6-9-20 コーポ市川201

決や将来の計画に役立てるものである。③実存・自己理解には、回想によって自己理解を高める、人生の意味を見いだすといった内容が含まれる。この研究では、質問紙を作成し実証的に検証した点では先駆的だが、全ての項目が先行研究の文献から恣意的に構成されている点、調査対象者が偏っているために結果を一般化できない点等が問題点として指摘されている (Webster, 1993)⁶⁾。

Wong & Watt (1991)²⁾ は、回想に関して、「遠い過去についての個人的記憶で、それは個人が体験あるいは観察した出来事についての長期記憶からなる」と定義し、どの回想類型がサクセスフル・エイジングと関連があるのかを検討する目的で、施設入所者と地域住居者を対象に研究を行った。回想類型に関しては、過去あるいは重要な過去について話すように求め、その話の内容を分析し、6つの回想類型に分類した。①統合的回想とは、自己の人生を全体的に価値のあるものとして意味づけすることや、否定的な体験を受容することに役立つ回想である。②道具的回想とは、現在の問題や情緒的な悩みの解決や緩和に役立つものである。③伝達の回想とは、聞き手に知恵や経験を伝授するものである。④回避的回想とは、過去を美化し、過去の達成を誇示することで、心理的安定や自己評価を保つ機能がある。⑤強迫的回想とは過去の出来事に対する罪悪感が影響しており、その出来事の反芻、恨み、失望、抑うつ状態を示すものである。⑥物語的回想とは、過去に関して解釈や評価が伴わない過去の出来事の説明で、記述的な印象が強く、出身地や誕生日といった情報を含むものである。また、この研究では次のようなことが明らかにされている。第1に「統合的回想」、「道具的回想」が多く「強迫的回想」が少ないことが、サクセスフル・エイジングと関連していること、第2に、施設入居者に比べ、地域住居者に「統合的回想」、「道具的回想」が高いことである。この研究は、方法や手続きが洗練されている点が評価されているが、類型の規準となる会話の内容分析が、複雑で時間がかかるため、類型化の方法としてあまり適切ではないことが報告されている (Webster, 1993)⁶⁾。

Webster (1993, 1997)^{6,7)} は、上記の2つの研究の信頼性・妥当性を疑問視し、43項目からなる質問紙を作成し、回想の機能に関して次の8因子を見いだした。それぞれの因子は、①退屈の軽減、②死への準備、③同一性、④問題解決、⑤会話、⑥親密性の維持、⑦悲しい出来事の再生、⑧教育・情報である。各因子の具体的な項目について、①退屈の軽減とは、退屈をまぎらわすために回想をするといった

項目、②死への準備とは、回想した後に死の恐れを軽減できるため、あるいはより落ち着いて死を受け入れるために回想するといった項目を含む。③同一性とは、自分自身をよりよく理解するために、④問題解決とは、現代の問題を解決するため、⑤会話とは、簡単な会話の話題を作るため、旧友や新しい友人と共通の会話をするためといった項目からなる。⑥親密性の維持とは、亡くなった親しい者の記憶をいきいきと甦らすため、⑦悲しい出来事の再生とは、辛い記憶を思い出す、⑧教育・情報とは文化的価値や当時の生活について若い世代に教えるためといった項目を含む。また、この質問紙の信頼性、妥当性は確認されている (Webster, 1993, 1997)^{6,7)}。

わが国でも、太田・上里 (1999)¹³⁾ は、18項目からなる高齢者用回想機能尺度を作成し、因子分析の結果、①積極的な回想と②否定的な回想といった2因子を抽出している。①積極的な回想とは、「回想することによって、将来の計画を立てる」や「回想することで今かかえている問題をいろいろな見方で考えることができる」や「新しい友人や知人と親密になることができる」などの13項目からなっている。先に述べた Wong & Watt (1991)²⁾ の「道具的回想」と「統合的回想」や Webster (1993)⁶⁾ の「問題解決」と「親密性の維持」と同様の概念を包括するものとして捉えられており、回想することに対して、肯定的な評価や態度や感情を示す内容から構成されている。②否定的な回想とは、「回想することによって、辛い思い出が再び思い出される」や「苦い体験を思い出して辛くなる」などの5項目を含み、Wong & Watt (1991)²⁾ の「強迫的回想」や Webster (1993)⁶⁾ の「悲しい出来事の再生」とほぼ同様の概念として捉えられている。つまり、回想することに対して、否定的な評価や態度や感情を示す内容から構成されている。

また、太田・上里 (1999)¹³⁾ は、2因子それぞれの得点の高低の組み合わせによって、「両価型」、「否定型」、「積極型」、「叙述型」の回想類型に分類している。この回想類型と気分状態との関連性を検討した結果、「両価型」と「否定型」の高齢者は、他の類型に比べて不安の高さや抑うつ感、いらいら感、思考力が低く、一方、「積極型」と「叙述型」の高齢者は、他の類型に比べて躍動感や活力が高かった。また、回想類型と人生満足度との関連性について、「積極型」と「叙述型」の高齢者は、他の類型に比べて人生満足感が強かった。

4. 回想に関連する要因

上述のように、回想にはさまざまな機能や内容の回想があり、様々な要因が回想に関連している。ま

ず内的な要因としては、現在満足度や年齢、発達段階などが回想を左右する。現在満足度に関して、高齢者で回想頻度が高い者は、現在満足度が低く、死について意識することが強い(長田・長田, 1994)²⁾。年齢や発達段階に関しては、各年代によって回想する意味や機能が異なっている。青年期では、自我同一性の確立のために回想頻度が他の年代に比べて高く(長田・長田, 1994; Webster, 1994)^{3,14)}、壮年期では、問題解決に関する回想が多い(Lieberman & Falk, 1971; Webster, 1997)^{5,7)}。他にも、パーソナリティ、健康状態などが回想に関連していることが明らかにされている(Webster, 1993, 1994)^{6,14)}。

次に、外的な要因としては、個人が置かれている生活状況がある。例えば、地域住居者、施設入所の待機者、長期施設入所者それぞれの回想頻度について比較したところ、施設入所の待機者は他に比べて、回想の頻度が有意に高い(Lieberman & Falk, 1971)⁵⁾。また、社会的ストレスにさらされた直後に回想する者は、回想しない者に比べて、過去と現在における自己概念の一貫性を認識しやすいことが報告されている(Lewis, 1971)⁶⁾。

5. 回想類型を規定する要因

Romaniuk & Romaniuk(1981)¹⁾はさきに紹介したように3つの類型を見いだしている。それとともに、どのような事柄が回想を引き起こすのかについても検討した。特定の事柄について、21項目からなる質問紙を作成し、各項目ごとにどの程度回想を引き起こす事柄としてあてはまるかについて、高齢者に評定させた後、因子分析を行った。その結果、①自己の死の意識、②他者に対する死の意識、③目的の認識や達成、④身体の変化や治療、⑤職業や生活志向の変化の5因子を抽出した。なかでも、②他者に対する死の意識の因子に含まれる「重要な人の死」の項目に対しては、調査対象者の74%が該当すると答え、④身体の変化や治療の因子に含まれる「身体衰弱の意識」の項目には69%が該当すると答えている。また、3つの類型と回想を引き起こす事柄との関連を検討した結果、「自己への敬意・自己イメージの効用」と「③目的の認識や達成」との関連、「実存・自己理解」と「④身体の変化や治療」との関連が示されている。

現在のところ、類型化する試みは多くの研究者によって行なわれているが、類型を規定する要因についての研究は少なく、実証的研究としては、Romaniuk & Romaniuk(1981)¹⁾の研究をみるにすぎない。そこで、本研究では回想類型を規定する要因の1つとして、高齢者のライフイベント体験を取り挙げて検討したい。

6. 老年期におけるライフイベント体験

老年期において、竹中(1996)¹⁷⁾は、個人の今までの生活史が色濃くにじみ出る独自のものということをもふまえた上で、老年期を取り巻く状況として、①喪失、②孤立・孤独、③死の現前化などを挙げている。①喪失については、自己像、心身の状態、役割、人間関係の喪失などがあり、②孤立・孤独には、自ら選ぶことのできない孤独、老いそのものに根ざした孤独などが含まれる。③死の現前化については、死の意識とともに、自分が生きていることの後ろめたさが含まれている。「高齢者は、最も適応力が衰えた時期に、最も厳しい適応を要求されている」という竹中(1996)¹⁷⁾の言葉に示されているように、老年期は、老いと闘いによって、老人だけが獲得し得る成熟に向かう年代でもあり、多くの老人が特有の出来事を経験する年代でもある。

また、老年期に体験するさまざまな出来事が、精神状態や適応状態に影響することが明らかにされている。下仲(1995, 1996)^{18,19)}は、本人にとって「悪い」と評価された、悪いライフイベント体験が多い人ほど、それを体験しなかった者に比べ、精神的健康が悪く、主観的幸福感、主観的健康感、夫婦関係満足度が低く、神経症的傾向が高いとの知見を得ている。つまり、悪いライフイベント体験の数が増すにつれて精神的健康が悪くなること、そして、この状態はイベント体験直後のみならず2年後においても持続することを明らかにしている。一方、本人にとって「良い」と評価された、良いライフイベント体験が多い人ほど、その体験がなかった者に比べ、主観的幸福感、自尊感情、外向性傾向、活動能力、夫婦関係満足度、ソーシャルサポートが高いことを報告している。

これらの報告によって、高齢者の精神状態や心理的適応を考える際に、ライフイベント体験を考慮することの重要性が示唆されている。よって、高齢者の回想類型を検討する場合においても、ライフイベント体験という要因との関連性を取り上げることが必要ではなかろうか。

そこで本研究では、高齢者を対象に、ライフイベント体験と回想類型との関連について質問紙を用いて検討することを目的とする。具体的には、回想の類型を規定する要因の一つとして3種類のライフイベント(悪い、中立、良い)を取り上げ、4つの各回想類型(両価型、積極型、否定型、叙述型)と3種類のライフイベント体験との関連について検討する。加えて、各類型に回想頻度の差があるのか、またライフイベント体験の有無や種類に応じて回想頻度が異なるのかどうかについても検討する。

対象と方法

調査は、2001年7月上旬から8月上旬にかけて、高齢者大学、市民講座の受講者、老人クラブの会員、シルバー人材派遣の登録者を対象に、質問紙を配布し、実施した。回収に際しては、その場で実施し回収したものと、数日後に回収したものと、郵送で回収したものがあつた。有効回答者163名(男性66名、女性97名、平均年齢71.23±6.58歳)を分析対象とした。

1. 質問項目

質問紙は、①回想頻度、②回想類型、③ライフイベント体験を測定する尺度で構成し、合計40項目であつた。

1.1 回想頻度を測定する尺度(1項目)

長田・長田・井上(1989)¹⁰⁾によって、高齢者の過去回想について実態調査する際に作成された質問紙から、回想頻度に関する項目を用いた。項目に対する回答は、「かなりよく考える=1」、「よく考える=2」、「どちらともいえない=3」、「あまり考えない=4」、「全く考えない=5」の5件法で求めた。採点方法は、選択した番号の逆転した値(かなり良く考える=5点、よく考える=4点、どちらともいえない=3点、あまり考えない=2点、全く考えない=1点)で採点した。

1.2 回想類型を測定する尺度(18項目)

太田・上里(1999)¹³⁾によって、高齢者の回想機能を評価するために作成された高齢者用回想機能尺度を用いた。ただし、本研究では、次のような変更をした。高齢者用回想尺度では、「回想することで、仲間意識を持てる」、「回想することによって、将来

の計画を立てる」というように、冒頭が「回想することで」、「あるいは「回想することによって」という言葉で始まっているが、本研究では、この部分を「昔のことを思い出したり、思い出話をするので」という言葉に変更した。これは、回想という言葉の意味を、具体的にわかりやすく示すためである。

この尺度は、「積極的な回想」と「否定的回想」といった2因子から構成されている。そして、2因子それぞれの、得点の高低の組み合わせによって、「両価型」、「否定型」、「積極型」、「叙述型」の回想類型に分類される。また、太田・上里(1999)¹³⁾によって、この尺度の信頼性、妥当性は確認されている。

項目に対する回答は、「全くそう思う=1」、「だいたいそう思う=2」、「どちらともいえない=3」、「あまりそう思わない=4」、「全くそう思わない=5」の5件法で求めた。具体的な項目内容の例を表1に示す。

1.3 ライフイベント体験を測定する尺度(21項目)

下仲(1995,1996)^{18,19)}の中高年期におけるライフイベントに関する研究に用いられた項目のうち、中年期に体験するライフイベントの項目を除外し、老年期にふさわしい項目のみを用いた。各項目の回答の仕方については、まずそのライフイベントを1年以内に体験したか否かを質問し、体験したという回答の場合には、そのライフイベント体験が本人にとってどのようなものであつたかについて、評価を求める。その出来事が本人にとって、「悪い=1点」、「やや悪い=2点」、「良くも悪くもない=3点」、「やや良い=4点」、「良い=5点」の5件法で回答を求めた。具体的な項目内容の例を表2に示す。

表1 高齢者用回想機能尺度の項目内容例

因子	項目内容
I. 積極的な回想	回想することで、仲間意識をもてる 回想することによって、将来の計画を立てる 回想することによって、人と過去の思い出を分かち合うことができる
II. 否定的な回想	回想することによって、つらい思い出が再び思い出される 回想することによって、昔の失敗をくよくよ思い出す 回想することによって、苦い体験を思い出してつらくなる

表2 ライフイベントの項目内容例

ライフイベント		
子供の誕生	退職、引退	子供との別居
孫の誕生	配偶者の退職、引退	子供との同居
父母(義父母)との死別	定年による転職、再就職	家庭内のトラブル
兄弟姉妹との死別	子供の転職、再就職	夫婦関係のトラブル
配偶者との死別	引越し、家の新築	自分自身の病気やけが
友人との死別	環境の変化	家族の病気やけが

2. 手続き

調査を実施するにあたり、高齢者の回想について、また1年以内に体験した出来事についてお尋ねしていること、秘密の保持、回答についての注意点、調査は強制ではないことなどを説明し、同意を得た。結果の分析に関しては、SAS、SPSSを利用した。

結 果

1. 高齢者用回想機能尺度の因子構造

各項目の回答について、「全くそう思う」を5点、「だいたいそう思う」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまりそう思わない」を2点、「全くそう思わない」を1点として得点化した。次に高齢者用回想機能尺度の因子構成を明らかにするため、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、2因子が抽出された(寄与率48.43%)。なお、抽出された因子とそれに含まれる項目(因子負荷量が.40以上の項目)および各因子の寄与率をまとめたものが表3である。回想機能尺度の構成は太田ら(1999)¹³⁾を踏襲していたので、第一因子、第二因子の命名は「積極的な回想」、「否定的な回想」とした。

2. 回想類型についての検討

回想類型について検討するために、太田ら(1999)に倣って回想機能尺度の各項目の得点を平均0、標準偏差1の標準得点に変換した。その標準得点をもとにして、k-means法によるQモードのクラスター分析を行った。なお、今回のクラスター分析は大田ら(1999)に倣った。その結果、クラスターに含まれる対象者のバランスを考慮して、クラスター数は4と判断された。図1は、回想類型のクラスター群の特徴について示したものである。クラスター1(以下CL1と略記)には22.69%、クラスター2(CL2)には、34.35%、クラスター3(CL3)には22.08%、クラスター4(CL4)には20.85%の対象者が含まれている。

この結果より、CL1は、「積極的な回想」と「否定的な回想」の両者の得点が高く、過去の回想を行う際に、過去の回想に肯定的な評価や感情と、否定的な評価や感情の両者が混在していると考えられる。また、太田・上里(1999)¹³⁾の「両価型」と同じ傾向がみられることから、本研究においても「両価型」と命名した。

CL2では、「積極的な回想」が高く、「否定的な回想」が低い。よって、回想することに対して、肯定的な評価や態度、あるいは感情をもっていると判断される。また、太田ら(1999)¹³⁾の「積極型」とほぼ同じ傾向がみられることから、本研究においても「積極型」と命名した。

CL3では、「積極的な回想」と「否定的な回想」の両者が低く、得点差がそれほど大きくない。よって、過去の回想に対して、積極的でも否定的でもない評価、態度や感情等をもたず、出来事や事実を叙述的に回想するのではないかと考えられることから、「叙述型」と命名した。太田ら(1999)¹³⁾における「叙述型」とほぼ同じ傾向であるが、平均標準得点の値に違いがあり、太田らの「積極的な回想」と「否定的な回想」それぞれの得点(両者とも約-1.0)に比べ、本研究の得点(積極的な回想 = -.20、否定的な回想 = -.40)は小さい。

CL4では、「積極的な回想」の得点が、「否定的な回想」に比べて、非常に低い。よって、回想することに対して、否定的な評価や態度や感情が強いのではないかと考えられることから、「否定型」と命名した。太田ら(1999)¹³⁾における「否定型」との類似点として、「積極的な回想」の平均標準得点が、「否定的な回想」の得点に比べて低いということが挙げられる。だが、「否定的な回想」の平均標準得点に関しては、値の大きさに違いがみられ、太田で得られた得点(.50)に比べ、本研究の得点(-.35)は小さい。

以上のように、先行研究に比べて、平均標準得点に相違がみられる類型もあったが、各類型における「積極的な回想」と「否定的な回想」の特徴は類似していることから、本研究でも「両価型」、「積極型」、「叙述型」、「否定型」という4つの回想類型が示された。

3. 回想類型と回想頻度との関連

表4は、各回想類型における回想頻度の平均値と標準偏差を示したものである。4つの回想類型によって、回想頻度がどのように異なるかについて検討するために、回想類型を独立変数とし、回想頻度を従属変数として1要因の分散分析を行った。その結果、回想頻度において有意差がみられた($F(3, 159) = 20.25, p < .01$)。Tukey法による多重比較の結果、両価型と積極型とのあいだには回想頻度に差がみられなかったが、両価型と積極型の回想頻度が、叙述型と否定型よりも高いことが示された($p < .05$)。

表4 各回想類型における回想頻度の平均値および標準偏差

回想類型	回想 頻度	
	Mean	S. D.
両価型 (n=37)	4.13	0.75
積極型 (n=56)	3.71	1.05
叙述型 (n=36)	3.11	1.03
否定型 (n=34)	2.52	0.82

表3 高齢者用回想機能尺度の因子分析結果

質問項目 (18項目)	因子 負荷量		共通性
	I	II	
I. 積極的な回想			
8. 人と過去の思い出を分かちあうことができる	0.78	0.80	0.61
6. 楽しい出来事を思い出して楽しむ	0.77	0.10	0.61
11. 新しい友人や知人と親密になることができる	0.77	0.22	0.65
7. 仲間意識をもてる	0.77	0.80	0.60
10. 過去によかった出来事を確認することができる	0.74	0.12	0.57
12. 話題を提供することができる	0.72	0.17	0.55
14. 懐かしい気分になる	0.70	0.16	0.51
18. 人に話を聞いてもらえる	0.69	0.18	0.51
4. 自分のことを他の人に説明することができる	0.68	0.32	0.56
2. 人間関係ができる	0.63	0.90	0.36
5. 今かかえている問題をいろいろな見方で考えることができる	0.61	0.09	0.39
9. 将来の計画を立てる	0.60	0.80	0.37
16. 他の人を励ますことができる	0.55	0.25	0.36
II. 否定的な回想			
19. つらい思い出が再び思い出される	0.17	0.69	0.51
13. 昔の失敗をくよくよと思い出す	0.15	0.63	0.42
15. 他の人にいやな目に合わされたことを思い出す	0.24	0.56	0.38
3. 苦い体験を思い出してつらくなる	0.25	0.54	0.36
17. あまりいい気分にならない	-0.13	0.51	0.28
固有値	6.58	2.14	
因子寄与率 (%)	36.55	11.88	
累積寄与率 (%)	36.55	48.43	

(注) 冒頭の「昔のことを思い出したり、思い出話をするなどで、」は省略して記載

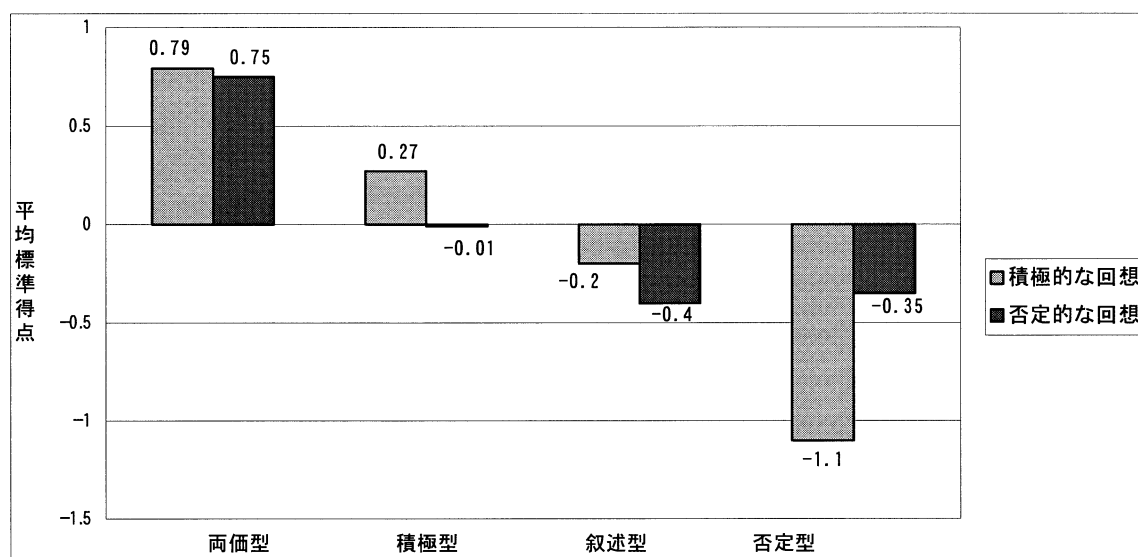


図1 回想類型のクラスター群の特徴

4. 回想類型とライフイベント体験との関連

ライフイベント体験については、ライフイベントを体験した本人の評価によって、「悪いイベント」、「中立的イベント」、「良いイベント」の3つに分類した。「悪いイベント」とは、「1.悪い」あるいは「2.やや悪い」のどちらかの回答が得られた場合である。「中立的イベント」とは、「3.どちらでもない」という回答が得られた場合である。「良いイベント」とは、「4.やや良い」あるいは「5.良い」のどちらかの回答が得られた場合である。

回想類型とライフイベント体験の有無や種類とのあいだに関連がみられるかどうかを検討するために、1年以内に体験した悪いイベント(0回,1回,2回以上の3群に分類),中立的イベント(0回,1回,2回以上の3群に分類),良いイベント(0回,1回,2回以上の3群に分類)別に、 χ^2 検定を行った。

表5は、悪いイベントの体験数別に、各回想類型の人数を示したものである。 χ^2 検定の結果、悪いイベント体験では、各回想類型の人数の偏りは有意であった($\chi^2(6)=14.69, p<.05$)。そこで、残差分析を行った結果、表6にみられるように、両価型の高齢者には、悪いイベントを2回以上体験した人数が有意に多く、否定型には、悪いイベントを2回以上体験した人数が有意に少ないことがわかった。つまり、悪いイベントを2回以上体験した高齢者のうち、回想類型が両価型である者の割合が有意に高く、否定型である者の割合は有意に低いことが示された。

表5 悪いイベント体験数別における各回想類型の人数

回想類型	両価型	積極型	叙述型	否定型	計
0回	18	31	25	23	97
1回	7	16	8	10	41
2回以上	12	9	3	1	25
計	37	56	36	34	163

表6 表5の調整された残差

回想類型	両価型	積極型	叙述型	否定型
0回	-1.53	-0.78	1.37	1.08
1回	-0.99	0.72	-0.45	0.64
2回以上	3.28**	0.18	-1.88	-2.25*

*: $p<.05$ **: $p<.01$

一方、中立的イベント体験と良いイベント体験では、 χ^2 検定の結果、各回想類型の人数の偏りに有意差は示されなかった。なお、表7は中立イベントの体験数別に、各回想類型の人数を示したものであり、表8は良いイベントの体験数別に、各回想類型の人数を示したものである。

5. 回想頻度とライフイベント体験との関連

悪いイベントの体験数(0回,1回,2回以上の3群に分類)によって、回想頻度がどのように異な

表7 中立的イベント体験数別における各回想類型の人数

回想類型	両価型	積極型	叙述型	否定型	計
0回	30	38	25	22	115
1回	4	13	8	10	35
2回以上	3	5	3	2	13
計	37	56	36	34	163

表8 良いイベント体験数別における各回想類型の人数

回想類型	両価型	積極型	叙述型	否定型	計
0回	28	42	27	27	124
1回	7	11	6	5	29
2回以上	2	3	3	2	10
計	37	56	36	34	163

るかについて検討するために、悪いイベントの体験数を独立変数とし、回想頻度を従属変数として1要因の分散分析を行なった。その結果、有意差がみられた($F(2,160)=3.72, p<.05$)。Tukey法による多重比較を行った。その結果、悪いライフイベントを2回以上体験した場合、1回の体験とのあいだには差がみられなかったが、体験がなかった場合(0回)よりも、回想頻度が高いことが示された($p<.05$)。表9は、悪いイベント体験における各体験数別の、回想頻度の平均値および標準偏差を示している。

表9 悪いイベント体験数別における各回想頻度の平均値および標準偏差

悪いイベント体験	回想 頻度	
	平均値	標準偏差
0回 (n=97)	3.29	1.09
1回 (n=41)	3.41	1.20
2回以上 (n=25)	3.96	0.78

一方、中立的イベント体験、良いイベント体験では、体験数(0回,1回,2回以上の3群)を独立変数、回想頻度を従属変数として1要因の分散分析を行なった結果、有意差は示されなかった。なお表10は中立的イベント体験における各体験数別の、回想頻度の平均値および標準偏差を示している。表11は良いイベント体験における各体験数別の、回想頻度の平均値および標準偏差を示している。

表10 中立的イベント体験数別における各回想頻度の平均値および標準偏差

中立的イベント体験	回想 頻度	
	平均値	標準偏差
0回 (n=115)	3.46	1.08
1回 (n=35)	3.20	1.10
2回以上 (n=13)	3.76	1.16

表11 良いイベント体験数別における各回想頻度の平均値および標準偏差

良いイベント体験	回想 頻度	
	平均値	標準偏差
0回 (n=124)	3.38	1.10
1回 (n=29)	3.58	1.11
2回以上 (n=10)	3.50	1.08

考 察

本研究では、高齢者を対象に、3種類のライフイベント体験と4つの回想類型との関連について質問紙を用いて検討した。また、回想頻度に関しても、各類型における回想頻度の差や、ライフイベント体験の有無や種類における回想頻度の差について検討した。その結果、ライフイベント体験の種類と回想類型とのあいだに関連があることや、ライフイベント体験と回想頻度が関連していることなどが明らかになった。

1. 回想類型とライフイベント体験との関連

今回の研究から、両価型の高齢者には、この1年以内に悪いライフイベントを2回以上経験した者が多いということが示された。両価型とは、「積極的な回想」と「否定的な回想」といった2因子とも高いことが特徴である。「否定的な回想」の因子は、Wong & Watt (1991)¹²⁾の「強迫的回想」とほぼ同様の概念と捉えられているが、彼らの研究によって「強迫的回想」が少ないことが、サクセスフル・エイジングと関連することがわかっている。また、太田・上里(1999)¹³⁾の研究では、両価型の高齢者は、他の類型に比べて不安の高さや抑うつ感、いらいら感、思考力の低下を示し、人生満足度が低いということが示されている。これらの先行研究から、両価型が不適応状態と関連があることが考えられる。

特に、この両価型がもつ特徴は、下仲(1995, 1996)^{18,19)}によって報告されている、悪いライフイベント体験が多い人ほど、それを体験しなかった者に比べ、精神的健康が悪く、主観的幸福感、主観的健康観、夫婦関係満足感が低く、神経症的傾向が高いという特徴と類似している。

これらのことから考慮すると、ある類型に特徴的とされる状態や症状が、実は回想に先行する何らかの出来事や状況によって引き起こされた特徴や症状かも知れず、それがある回想類型に独自の特徴なのか、それとも、何か別の要因が引き起こした特徴と混同したものなのか不明である。この状態をより明らかにするためには、両価型に分類された高齢者のうち、3種類のライフイベント体験(悪い、中立、良い)の有無や回数の異なる群で、さまざまな精神

状態を比較することが必要である。とりわけ回想自体が様々な要因と関連する複雑な現象であり、各類型に独自の特徴を明確に示すには、多くの困難さが伴うことが予想されるが、各類型の特徴を探っていくうえで、その類型に分類された者がどのような出来事を体験したのかどうかを考慮することは必要である。

次に、今回の研究において、悪いライフイベントを2回以上体験した場合、その体験がなかった場合(0回)よりも、回想頻度が高いということが示された。悪いライフイベントには、「友人との死別」が最も多く、次いで「家族の大きな病気やけが」、「兄弟姉妹との死別」といった喪失体験が多かった。Romaniuk & Romaniuk (1981)¹¹⁾は、どのような事柄が回想を引き起こすかのかについて調べた結果、調査対象者の74%が「重要な人の死」と回答したと報告している。

このことから、1年以内に体験した悪いライフイベントによって、回想が引き起こされたのではないかと考えられる。特に、両価型の高齢者には、悪いライフイベントを2回以上体験した人数が有意に多かったという結果を考え合わせると、友人や兄弟姉妹といった重要な人の死といった悪いライフイベントの体験は、両価型の回想を引き起こしやすいのではないかと考えられる。

この考えを進めると、なぜ、悪いライフイベント体験によって引き越される回想が、両価型の回想なのだろうか。両価型とは、先にも述べたが、「積極的な回想」と「否定的な回想」といった2因子とも高いことが特徴である。

まず、「否定的な回想」はなぜ高いのであろうか。「否定的な回想」とは、回想することによって、「辛い思い出が再び思い出される」や「苦しい体験を思い出して辛くなる」など、回想することに対して、否定的な評価や態度や感情を示す内容から構成されている。Wong & Watt (1991)¹²⁾の「強迫的回想」や、Webster (1993)⁶⁾の「悲しい出来事の再生」とほぼ同様の概念と捉えている。これらは、過去の出来事に対する罪悪感が影響しており、その出来事の反芻、恨み、失望、抑うつ状態を示すということが報告されている。また、Leik & Nielsen (1998)²⁰⁾によると、重要な人との死別した遺族の心は、絶望、恐怖、孤立、激しい罪悪感、怒り、見捨てられ感といった、悲嘆の情緒に満ちており、この悲嘆の情緒が和らぐには、数年かかると述べている。これらのことを考慮すると、喪失という悪いライフイベント体験によって引き起こされた、悲嘆の情緒の中で、「否定的な回想」が引き起こされることは、当然なプロセスと言えよう。つまり、「否定的な回想」は、悲

嘆のプロセスの一部に含まれるものと考えられる。

では、「否定的な回想」とともに、なぜ「積極的な回想」も高いのであろうか。積極的回想とは、回想することに対して、肯定的な評価や態度や感情を示す内容から構成されており、Wong & Watt (1991)¹²⁾の「道具的回想」と「統合的回想」や Webster (1993)⁶⁾の「問題解決」と「親密性の維持」と同様の概念を包括している。各内容を見ていくと、「道具的回想」や「問題解決」は、現在の問題や情緒的な悩みの解決や緩和に役立つもの、「統合的回想」は、自己の人生を全体的に価値のあるものとして意味付けすることや、否定的な体験を受容することに役立つものである。また、「親密性の維持」は、亡くなった親しい者の記憶をいきいきと蘇らすためとなっている。これらのことを考慮すると、悪いライフイベント体験によって引き起こされた情緒的な悩みに対処するため、あるいは否定的な体験を受容するために、「積極的な回想」が活性化したと考える。Lewis (1971)¹⁶⁾は、高齢者の過去回想は、老年期の情緒の必要性に応じて動機付けされ、色付けされると特徴付けている。また、竹中 (1996)¹⁷⁾は、高齢者にとって、「過去はかけがえないものであり、今の自分の支え」と述べている。このように、喪失体験や危機的な体験に対処するために、さまざまな過去の体験が、自然に、あるいは意図的に呼び起こされているのかもしれない。

さらには、喪失体験などの悪いイベント体験が、それまでの自分の人生を振り返る機会となり、その過程を揺れ動かなかで、自己の人生を肯定的に受容するような「統合的回想」(Wong & Watt, 1991)¹²⁾が生じている可能性も考えられる。孤独といった厳しい状態が老いの成熟を生み出すという霜山 (1985)²¹⁾の言葉のように、一見否定的にみえる事柄が個人の成長につながることは少なくない。これらを考慮すると、悪いイベント体験は、個人にとって危機的な状態を引き起こす一方で、様々な回想や新たな視点を生み出すきっかけにもなり、さらには自己の人生の再統合や個人の成長に発展する可能性を含むものではなからうか。

また、野村 (1996)²²⁾は、Erikson の理論を踏まえて、人間は「みずからの体験の肯定・否定を揺れ動いて」自分の人生を振り返り、自分の人生を「肯定的に受容することより、むしろ人生は山あり谷ありと知る過程そのものが生きる力を生み出す」と述べている。さらに、太田・上里 (1999)¹³⁾は、「両価型」は人生の統合に向けたライフレビューを行っている状態であり、葛藤の渦中にある状態とも考えられると述べている。これらを考慮すると、「否定的な回想」と「積極的な回想」のどちらかに偏らずに、この両方を含む「両価型」という回想類型の肯定的

な意味について、今後検討していく必要がある。

次に、悪いライフイベントを2回以上体験した高齢者の中には、「否定型」に分類された人数が、有意に少なかった。このことは何を意味するのであろうか。これとは反対に、悪いライフイベントを2回以上体験した高齢者が有意に多く含まれた「両価型」と比較し、検討したい。まず、「否定型」とは、図1からわかるように、「積極的な回想」の得点(-1.1)が、「否定的な回想」(-.35)の得点に比べて非常に低いことが特徴である。一方、「両価型」では「積極的な回想」の得点(.79)と、「否定的な回想」の得点(.75)の得点がともに、「否定型」に比べて非常に高い。特に、「否定的な回想」に注目すると、「否定型」の得点(-.35)は、「両価型」(.75)の得点に比べて非常に低い。従って、「否定型」の者は、「両価型」の者と比べて、否定的な出来事の反芻、恨み、失望、抑うつ状態をあまり示さないのではないかと考えられる。先に、喪失のような悪いライフイベントを体験した場合、悲嘆の情緒とともに、「否定的な回想」が引き起こされるのではないかと記述したが、「否定型」の者が示す状態はこれと一致しにくい。そのようなことから、2回以上の悪いライフイベント体験者に「否定型」の人数が少ないのであろうか。本研究で得られた結果では、これらのことについて十分に検討することはできず、今後の課題として検討を進めていく必要があると考えられる。

なお、積極型と叙述型については、3種類のライフイベント体験すべてにおいて、関連性が見出せなかった。ただ、この2つの類型の共通点として、太田・上里 (1999)¹³⁾の研究から、「積極型」と「叙述型」は、他の類型に比べて躍動感や活力が高く、人生満足度が高いことが示されている。この共通点が、今回の結果と何か関連性があるのかどうかは、今後の課題として検討していく必要があると考えられる。

おわりに

本研究では、太田・上里 (1999)¹³⁾の高齢者用回想機能尺度を用いた結果、先行研究と同じ因子が抽出された。また、その因子得点の高低の組み合わせによって4つの回想類型に分類し、それらを基に各検討を進めた。その際、本研究で得られた回想類型と太田らのそれらは、ほぼ同じ特徴をもつことから、太田らの研究によって示されている各類型の特徴や心理的な適応状態などを参考に考察を進めた。だが、上述したように、両研究間で、「叙述型」と「否定型」に関して、2因子それぞれの平均標準得点の値に多少の相違があったことを考慮すると、太田らによって示された各類型がもつ特徴が、本研究での各

類型にあてはまらないこともありえる。よって、今後、回想類型やライフイベント体験との関連を検討する際に、心理的な適応状態や精神状態をも測定することで、より正確に検討できると考えられる。

本研究では質問紙を用いて高齢者の回想を検討したが、調査対象者のうち、回想することがほとんどない

者に対しては、個人の回想体験というよりも、回想に対する一般的意見や価値を測定しているかも知れず、調査対象者が何を意図して回答したのか確認できない。よって、質問紙を用いて回想類型について検討するとともに、個別に、より詳細な情報を得るなど、それを補うような方法を用いることも必要である。

文 献

- 1) Butler RN: The life review. An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry*, **26**, 65-75, 1963.
- 2) 長田由紀子, 長田久雄: 高齢者の回想と適応に関する研究. *発達心理学研究*, **5**(1), 1-10, 1994.
- 3) Kovach C: Promise and Problems in Reminiscence Research. *Journal of Gerontological Nursing*, **16**(4), 10-14, 1990.
- 4) Merriam SB: The Uses Of Reminiscence in Older Adulthood. *Educational gerontology*, **19**, 441-450, 1993.
- 5) 大和三重: 欧米における回想研究の史的展開—機能分類の試み—. *社会老年学*, **29**, 51-63, 1989.
- 6) Webster JD: Construction and Validation of the Reminiscence Functions Scale. *Journal of Gerontology*, **5**, 256-262, 1993.
- 7) Webster JD: The reminiscence Functions Scale. A replication. *International Journal of aging and human development*, **44**(2), 137-148, 1997.
- 8) McMahon AW and Rhudick PJ: Reminiscing. Adaptational Significance in the Aged. *Archives of General Psychiatry*, **10**(3), 292-298, 1964.
- 9) Coleman PG: Measuring reminiscence characteristics from conversation as adaptive features of old age. *International Journal of Aging and Human development*. **5**, 281-294, 1974.
- 10) 長田由紀子, 長田久雄, 井上勝也: 老年期の過去回想に関する研究 I. *老年社会科学*, **11**, 183-201, 1989.
- 11) Romaniuk M and Romaniuk JG: Looking Back. An Analysis of Reminiscence Functions and Triggers. *Experimental Aging Research*, **7**(4), 477-489, 1981.
- 12) Wong P and Watt L: What types of Reminiscence Are Associated With Successful Aging? *Psychology and Aging*, **6**(2), 272-279, 1991.
- 13) 太田ゆず, 上里一郎: 高齢者の回想タイプと心理的適応との関連性についての検討. *研究助成論文集*, **35**, 143-151, 1999.
- 14) Webster JD: Predictors of Reminiscence. A Lifespan perspective. *Canadian Journal on Aging*, **13**, 66-78, 1994.
- 15) Lieberman MA and Falk J: The remembered past as a source of data for research on the life cycle. *Human Development*, **14**, 132-141, 1971.
- 16) Lewis CN: Reminiscing and Self-Concept in Old Age. *Journal of Gerontology*. **26**(2), 240-243, 1971.
- 17) 竹中星郎: 老年精神科の臨床—老いの心への理解とかかわり—. 第3版, 岩崎学術出版社, 東京, 7-37, 1996.
- 18) 下仲順子, 中里克治, 河合千恵子, 佐藤眞一, 石原治, 権藤恭之: 中高年期におけるライフイベントとその影響に関する心理学的研究. *老年社会科学*, **17**(1), 40-56, 1995.
- 19) 下仲順子, 中里克治, 河合千恵子, 佐藤眞一, 石原治, 権藤恭之: 中高年期に体験するストレスフル・ライフイベントと精神的健康. *老年精神医学雑誌*, **7**(11), 1221-1230, 1996.
- 20) Leick N & Nielsen M: Healing pain. attachment, loss, and grief therapy. Routledge, Great Britain, 1991.
(平山正実・長田光展監訳: 癒しとしての痛み—愛着, 喪失, 悲嘆の作業—. 第2版, 岩崎学術出版社, 東京, 41-95, 1998.)
- 21) 霜山徳爾: 老いと死の意味—五雨十雨—. 馬場謙一・福島章・小川捷之・山中康裕編, 老いと死の深層, 初版, 有斐閣, 東京, 1-41, 1985.
- 22) 野村豊子: Haight による“構造化ライフレビュー”. *看護学雑誌*, **60**(11), 1026-1030, 1996.

A Study of the Relationship between Life Events and the Types of Reminiscence in Later Life

Hiromi FUJIWARA and Osamu SHIMADA

(Accepted Nov. 29, 2003)

Key words : ELDERY, TYPES OF REMINISCENCE, LIFE EVENTS

Abstract

This study using a questionnaire, investigated the relation between life events and different types of reminiscence. This study also compared the frequency of reminiscence in each life events and the type of reminiscence. Life events were classified into different categories: negative, neutral and positive. Four types of reminiscence were identified: ambivalence, positive, narrative and negative.

A sample of 163 elderly people was analyzed. The results show that subjects who experienced two negative life events within one year more frequently than those who had not. And each of the subjects who were classified into ambivalence or positive type of reminiscence reminisced more than those in the negative type.

Correspondence to : Hiromi FUJIWARA The School of Human Studies, Taisyuu University
Toshima, 170-0001 , Japan
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.13, No.2, 2003 283-293)